

楽観的21世紀論

大前 繁雄

21世紀初頭の年であった昨年は、“暗いスタートを切った”というのが大方の世評のようである。外には、9月11日の米国同時多発テロ、内には、底の见えない不況の進展がそういわせているようであるが、果たしてそうであろうか。

私の見方はその逆で、世界も日本も将来に曙光を見出しうる、良いスタートを切った年と思っている。以下、その理由を3点に分けて述べてみたい。

1. 禍を転じて福となす

まず世界であるが、なるほど9月11日に起った米国の同時多発テロについて、犠牲になられた方には大変お気の毒なことであるが、しかし、あの事件があったお陰で、アメリカそして日本を含めた世界の国々が一致団結してテロ撲滅に立ち上がり、空爆という荒療治があったものの、あの23年間も戦乱と荒廃の続いたアフガニスタンに平和が訪れたのである。

今後も引き続き、アメリカを中心として、残されたテロ勢力の殲滅が進められるであろうから、テロのない平和な世界が訪れるのも、そう遠い先のことではなかろう。まさに「禍を転じて福となす」の言葉どおり、9月11日の事件が世界に平和をもたらすきっかけとなったのである。

2. 終い良ければすべて良し

一方、国内に目を転ずれば、池田市の大阪教育大附属小学校の児童虐殺事件や狂牛病騒動など、暗い事件が続いた二〇〇一年であったが、年末にきて、皇太子殿下ご夫妻に待望のお子様愛子内親王様が誕生されたのは何よりの朗報であった。

周知の通り雅子様は、日本とアメリカの最高学府である東京大学とハーバード大学を、いずれも抜群の成績で卒業されたという世界有数の頭脳の持主であられるし、また皇太子殿下は二千年以上という世界にも稀な古い歴史と伝統を有する日本の皇室の血をひかれた比類なきお方である。そのお二人の間にお生まれになった愛子様は、どのような素晴らしい女性に成長して行かれるのか、想像するだけでも夢が膨らんでくる。

おそらく将来、皇室典範が改正され、近代初の女性天皇になれる可能性が

高いので、これからの日々、年々、愛子様のご成長ぶりを見ることの出来る私たちは本当に幸せ者である。

「終い良ければすべて良し」の言葉通り、わが国の昨年は明るいスタートの年であったといえよう。

3. 今の不況も天の配剤

しかし、一方で、現在の日本を覆う不況の長期化がどうにもやり切れない、という声が聞こえてくる。バブル期とまでいわなくとも、何とか景気の良い日本にしてもらいたい。そのためには従前通り国債を増発し景気浮揚をはかって欲しい、という声が巷に充満しているのであるが、私はそのような声は必ずしも日本の将来にとって良いものとは考えていない。

というのは、これからの日本は急速に人口が減少していく。二〇〇五年をピークに、それ以後毎年二百万人以上のペースで人口が減っていくのである。大雑把に言えば、毎年三百万人のお年寄りが亡くなって、百万人の赤ちゃんが産まれるという計算なのである。

そのためわが国の人口が、現在の一億人三千万人から一億人以下に減少するのは時間の問題といわれている。そうなれば企業の数も、大学の数も、その他諸々、現在ある数の70～80%くらいに縮小して行かねばならない。

小泉さんが進める構造改革は、そのような日本の人口の減少、とくに16才から65才までの生産人口の急速な減少を視野に入れた日本のスモール化、ミニマイズ化であり、そのような規模の縮小、効率化をできるだけ国民に与える痛みを少なくしつつ、やろうとするものである。

現在の不況も、そのような過程で生じる、避けることのできない一里塚であり、日本を再生させるために天が与えた配剤、試練と考えるべきものではなかろうか。

平成14年3月15日 西宮和歌山県人会便り